

# 第1回 教育課程部会

日時: 令和8年5月19日(火) 準備委員会終了後

会場: 文化センターホール

## 1 自己紹介

### 【教育課程部会】名簿

役職	所属	氏名	備考
部会長	東小学校長	北垣内 博	
副部会長	ICT教育コーディネーター	清水 智	
部員	公募委員	杉戸 香奈	
部員	園長会(すがかわ保育園)	櫻井 裕香	
部員	教職員経験者	宮寄佐智子	
部員	公募委員	新井 彩香	
部員	学識経験者(高校教員)	須野原 美香	
部員	南小学校教員代表	齋藤 義和	
部員	西小学校教員代表	浅井 茂樹	
部員	中学校教員代表	中村 有希	

## 2 委員長・副委員長から

## 3 話し合い

### (1) 2年間(令和8年・9年)でどのようなことを話し合っていくか

- ・ 各教科の学習内容や総合的な学習の時間のカリキュラムの具体は令和9年後半または令和10年から教職員を中心としたチームでの検討を予定しています。先生方中心の話し合いの前にその土台を検討したいと思います。
- ・ 令和11年の夏休みには新しい学校の教育計画をおおよそ完成させたいと考えています。部会で扱う内容の案は裏面をご覧ください。
- ・ 教科センター方式については資料を配布しますので各自でご確認ください。

### (2) 今後の計画について

裏面以降をごらんください。

## 教育課程部会 今年度の推進計画

※ 日付は予定です。時間は合同会は17:00~の会議内、単独の部会の場合は16:30~2時間程度を想定。

この部会の計画

- ① (令和8年度末までに) 夢や理想を語り合い、山ノ内町の理想の教育課程を考え準備委員会に提案する。  
→ ・ 先進校の教育課程 ・ 新学習指導要領を ・ 教科センター方式採用の是非 などについて学び考える
- ② (令和9年度末までに) 前年度の成果を学校と共有し、理想を具体化させ現場レベルの内容としていく。  
→ ・ 調整授業時数制度の活用方針 ・ 日課 ・ 学校行事の在り方 ・ 特別活動や児童生徒会の在り方 ・ 時数に含まれない時間の在り方 ・ 教職員との意識共有をする合同研修 などを考える。

## 「2030年の学びを、ここから。」—— 山ノ内町 未来の教育課程ロードマップ

【STEP 1】 令和8年度：理想を形にする（探究と提案）

【STEP 2】 令和9年度：現場へつなぐ（具体化と共有）



この部会で扱う内容（案）

内 容	
学 校 の 骨 格	調整授業時数制度の活用の仕方 町として大事にしたいこと
	現状の「学校」のよさと課題
	2期制・3期制のよさと課題 今後の方向
	(後期課程における)教科センター方式の採用について
	単位時間の弾力化 学年の区分とステージ
学 校 の 色	4つの柱(ESD、グローバル教育、スポーツ・芸術、人権教育)を具体化するカリキュラム
	幼保小中の連携と接続
	たてのつながりをつくる異学年交流 町全体を学びのフィールドとする学習
自 治	本当の意味でこどもが主役で中心の児童生徒会 学校行事
	学級活動以外の特別活動の運用
	チームとして機能する学校をつくるために

○ 第1回部会

日時 5月19日(火)

内容 部会の推進計画と今後のテーマの整理

以降の内容は部会での検討による

○ 第2回部会

日時 8月31日(月)

内容 (案) 先進校の教育課程から学ぶ 設計の考え方(教科センター方式の採用について)

○ 第3回部会

日時 9月25日(金)

内容

○ 第4回部会

日時 12月21日(月)

内容

○ 第5回部会

日時 2月19日(金)

内容

以降は令和9年度

○ 第6回部会

日時 5月ころ

内容 ①

○ 第7回部会

日時 7月ころ

内容 ①

○ 第8回部会

日時 9月ころ

内容 ①

○ 第9回部会

日時 11月ころ

内容 ①

○ 第10回部会

日時 2月ころ

内容 ①

今回設計を担当する宮本忠長建築設計事務所から後期課程で教科センター方式を採用する案が示されました。10月までにその方向を検討し、こちらの方針を伝える必要があります。

## 教科センター方式(教科教室型)について (Gemini による回答)

### 1 「教科センター方式」とは?

従来の学校では、子どもたちは自分のクラス(普通教室)にずっと席を置き、チャイムが鳴ると先生が教科ごとにやってくるのを「待つ」スタイルが当たり前でした。

これに対して「教科センター方式」とは、『各教科に特化した専用の部屋(センター)があり、授業ごとに子どもたちが自分の教材を持って、その部屋へ自ら移動する』という方式です。

イメージとしては、大学のキャンパスや、現代のコワーキングスペース(企業のオフィス)に近い形です。中学校の「理科室」や「音楽室」が、国語・数学・英語・社会など、すべての教科に広がったものと考えていただくと分かりやすいかと思います。

### 2 空間の特徴:教科の「色」に染まる教室と、ゆとりの空間

この方式では、教室が固定のクラスのものではないため、部屋全体をその教科の専門空間に仕上げることができます。

- 英語ルームに行けば、壁一面に海外の地図や英単語のポスターが貼られ、洋書や音声機材が並んでいます。
- 数学ルームに行けば、パズルや図形の模型、公式のヒントが常に掲示されています。

また、教室の周辺(廊下や共有部)には「教科メディアスペース」という、図書や生徒の作品を展示できる「空間のゆとり(余白)」が設けられます。子どもたちは、授業で刺激を受けるだけでなく、休み時間にもその空間で自然と知的好奇心を刺激されることになります。

### 3 なぜ今、この方式を検討するのか?(目指す教育像)

この方式の真の目的は、単に「校舎の中を移動すること」ではありません。

一番の狙いは、子どもたちの「主体性と自律性を育むこと」にあります。

「チャイムが鳴ったから、なんとなく座って授業を受ける」という受け身の姿勢から、「次の時間は〇〇を学ぶから、準備をしてあの部屋へ行こう」という能動的なマインドへの転換を、学校の「空間構造」そのものから促すアプローチです。これは、これからの時代に求められる「探究的な学び」や「持続可能な開発のための教育(ESD)」を実践する上で、非常に強力な器(ハード)となります。

### 4. 教科センター方式のメリットと懸念

新しい仕組みの導入を検討するにあたっては、良い面だけでなく、現場の負担や子どもの心理的な影響(懸念点)も正しく理解し、対策していく必要があります。

区分	メリット(期待される効果)	懸念点(課題)と解決へのヒント
子どもたちへの影響	① 学びのスイッチが入る 移動することで気持ちが切り替わり、教科の専門性に囲まれた空間に入ることによって学習意欲が高まります。	① 移動による疲れ・時間切れ 毎時間の移動が負担になったり、休み時間が移動だけで終わる懸念。 👉【対策】動線を短くする校舎設計や、移動時間を考慮した時間割の工夫が必要です。

区分	メリット(期待される効果)	懸念点(課題)と解決へのヒント
	<p>② 主体性と自律性が育つ 時間管理や次の授業の準備を自分で行うため、自己管理能力(セルフマネジメント)が身につきます。</p> <p>③ 学年を超えた多様な交流 移動の動線上で他クラスや他学年の生徒と自然に顔を合わせるため、学校全体が「一つのコミュニティ」になります。</p>	<p>② 「クラス(学級)の絆」の希薄化 クラス全員で一緒に過ごす時間が減る印象からの、帰属意識が薄れる懸念。 👉【対策】朝・帰りの学活や「給食の時間」は、拠点となるホームベースに必ず集まる運用で安心感を担保します。</p>
教職員への影響	<p>① 授業の質・専門性の向上 教員が自分の教科室を持てるため、毎時間の教材の持ち運びがなくなり、掲示物や実験器具、ICT環境を常にベストな状態にセッティングしておけます。</p> <p>② 授業準備の効率化 空き時間に自分の教科室で教材研究や次の準備ができるため、移動の手間が省けます。</p>	<p>① 「担任」として生徒を見守る難しさ 担任が自分のクラスの生徒の様子を休み時間に気軽に見に行くことが難しくなります。 👉【対策】教科ごとのゾーンに先生のデスク(教科職員室)を分散配置し、学校全体でどの子どもも見守る「チーム体制」へシフトします。</p>
施設・管理面	<p>① 空間の有効活用(可変性) クラス数の増減(少子化など)があっても、教室の用途を柔軟に変更しやすく、持続可能な校舎運用が可能です。</p> <p>② デジタル(ICT)との高い親和性 生徒の机の中を「常にカラ」にすることで、タブレット端末やデジタル教科書をフル活用した身軽な移動・学習が定着します。</p>	<p>① 荷物の管理と紛失のリスク 生徒が荷物(私物や教材)を持って動くため、忘れ物や紛失の心配があります。 👉【対策】生徒の「拠点(ホームベース)」に鍵付きの個人ロッカーを確実に整備し、机の中には何も残さないルールを徹底します。</p>

### 準備委員・教職員の皆様へ

教科センター方式は、これまでの「学校の当たり前」を大きく変える挑戦です。しかし、上板橋第二中学校をはじめとする全国の先進校では、「先生方の働き方改革(職員室のフリーアドレス化など)」や「デジタル化(ICT)」とセットで導入することで、非常にイノベティブで活気ある学校現場を実現しています。

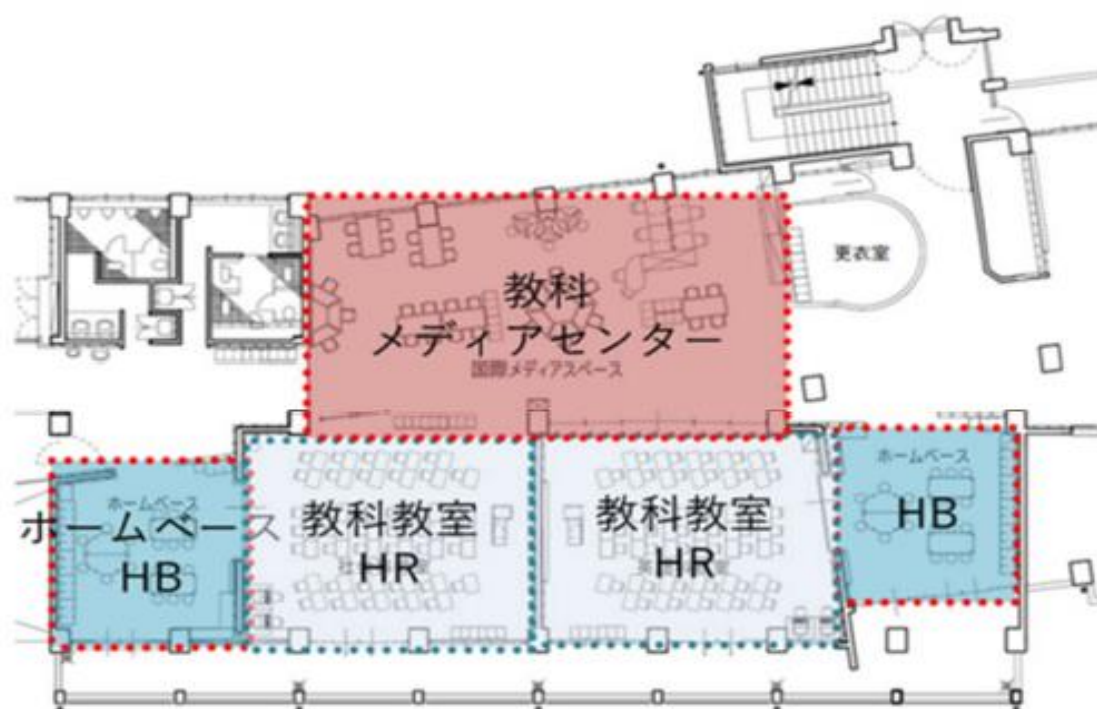
山ノ内町のこどもたちが、令和12年にどのような環境で学ぶのか。ハード(建築)とソフト(教育課程・運用)の両面から、委員会の皆様と知恵を出し合い、素晴らしい学校のカたちをつくっていただければと考えております。

## 教科センター方式の実装事例

学校名	茨城県大洗町立南中学校
所在地	茨城県大洗町
構造規模	鉄筋コンクリート造一部鉄骨造
面積	敷地面積：28,993 m <sup>2</sup> 建築面積：3,567 m <sup>2</sup> 延床面積：6,376 m <sup>2</sup>
学習運営方式	教科教室型

### 特徴

教科教室としてまとまりをつくり、教科のメディアスペース、教科の教材室、クラスの生活拠点やロッカースペースとなるホームベース等を組み合わせて教科センターを構成。



教科センター方式のユニット(大洗町立南中学校)

### 教科への主体的な関わり

- 各教科の教材を展示し開放することで、子どもたちが、自身が興味関心をもった分野について自ら調べ、探すなどの主体的な行動が促される。芸術関係のリソースセンター（情報提供・展示スペース）では、伝統や芸術文化に関する理解を深めることができる。

リソースセンター（情報提供・展示スペース）：

教科の魅力を伝えられる教材や作品を見せることで、児童・生徒の興味関心を引き、自ら学ぶ主体的な行動を促すことが期待できる。

## 特別教室・準備室等との位置関係

- ・ 授業で用いる教材等を保管するため、特別教室と隣接又は近接した場所に配置することで、教材の準備を行いやすくなる。
- ・ リソースセンター（情報提供・展示スペース）を準備室と連続して配置することで、教材や作品の入れ替えを行いやすくなる。

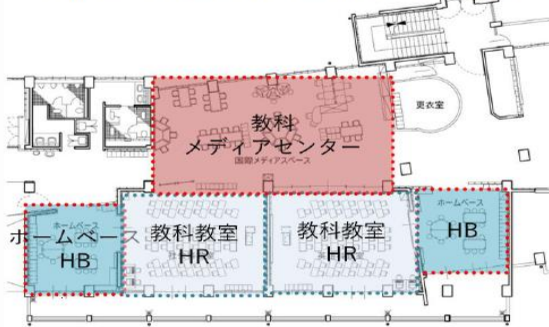


学習のための資料が展示された、理科教室と連続する理科リソースセンター

理科教室側から理科リソースセンターを撮影

## 教科センター方式：ホームベース

- ・ クラスの学校生活の拠点、クラスのまとまりをつくる
- ・ 居場所
- ・ 生活専用スペース、ロッカースペース
- ・ 生徒が自分たちの手で作り上げる場



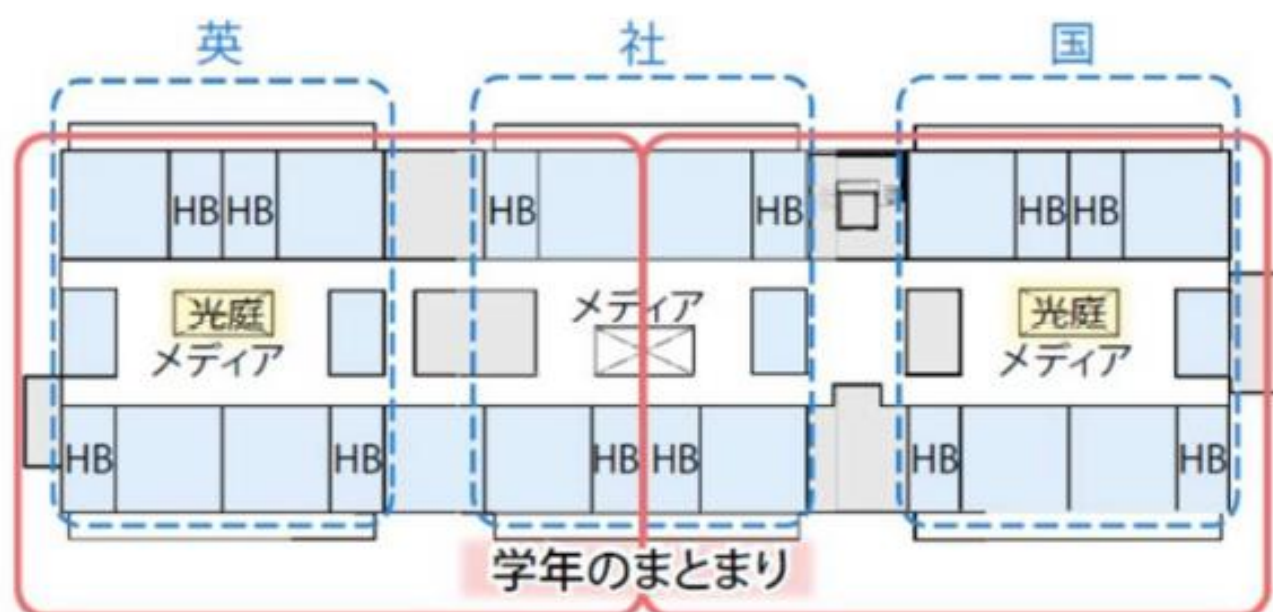
大洗町立南中学校



学校名	板橋区立上板橋第二中学校
所在地	東京都板橋区
構造規模	鉄筋コンクリート造一部鉄骨造 地上5階
面積	延床面積：9,611 m <sup>2</sup>
学習運営方式	教科教室型

### 特徴

各教科の深く協働的な学びを支える教科メディア

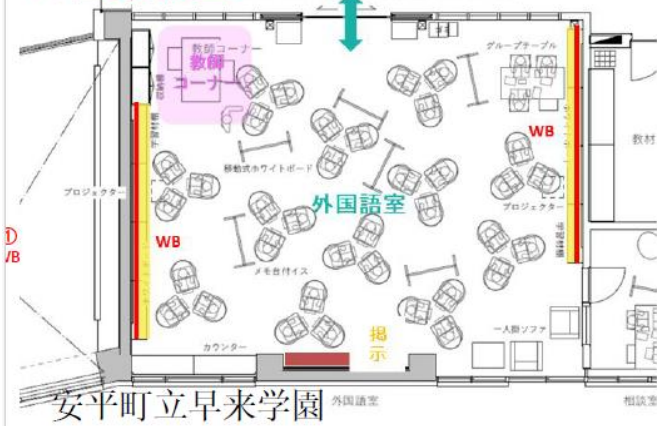


- 教科教室が集まるゾーンの中心に、「教科メディア」（英語メディア、国語メディアなど）と呼ばれるスペースを設けている。
- 教科メディアには、その教科に関する資料や書籍、生徒の作品などが展示・掲示され、椅子やテーブルが置かれて生徒が自由に歓談できるようになっている。
- 授業中にグループワークなどで使用することもある。
- 教科のゾーンには、各教科の職員室を設置。いわゆる「準備室」とは異なり、教員一人につき一台の机があり、教材や生徒の提出物などを保管できる。短い休み時間に職員室まで戻る必要がないため、働き方の効率化にもつながっている。

# 教科センター方式：教科教室



**外国語教室** ホワイトボードはスクリーンとして使えるようにマットタイプとしています。  
ホワイトボード下の棚は受付代わりにもなっています。



安平町立早来学園 外国語室